みなと
今・むかし新聞
第7号
平成１９年１０月

大山街道を歩く
～青山一丁目から表参道まで

前回に引き続き、大山街道を歩きました。青山一丁目交差点から表参道までです

道幅こそ広がりましたが、江戸の姿を見せる街道です。この道をたどりながら伊勢原・大山まで歩いた人々の気持ちが伝わってきます。

また、数多くの文化人がこの地域で活躍しました。歌人の斉藤茂吉を始め、土屋文明（歌人）、岡本かの子（作家）、岡本太郎（画家）、宇野千代（作家）等、文化の薫り漂うまちです。

さらに、新しい文化をすぐとりいれ流行の先端を見せるまちでもあります。

では、そのようなまちをちょっと、歩いて見ましょう。

青山小学校の伝説

『赤坂区史』のなかの「赤坂の思い出を語る座談会」で、岡野榮氏（女子学習院教授）が、夜泣き石という伝説を紹介してます。

「ここ青山は、青山家の屋敷でして、その庭には夜泣き石がありました。夜になると、石が泣くので気持ち悪いということで、近くの石屋さんが買い取りましたが売れませんでした。それを、青山小学校に寄付して、築山に置きました。」

このような話が伝わっておりました

著名人が眠る青山墓地

徳川家康が、天正十八年に江戸城へ入る前、青山常陸介忠成に「馬に乗り好きなだけ敷地を与える」といわれたので、この界隈を走り続けた土地を給したといわれてます。その区域が、現在の「青山墓地」のすべてが含まれてます。

現在、この墓地に永眠し我々を見守っています著名人の一部を掲載します。

明治の元勲・大久保利通、農学博士で忠犬ハチ公の飼い主・上野英三郎、作家「半七捕物帳」・岡本綺堂、医学者・北里柴三郎、歌人・斉藤茂吉等、そのほか、明治期に日本の成長に貢献した沢山の外国人もこの地に眠っております。

春が巡ってきますと、桜の花で埋め尽くされ、都心とは思えない素晴らしい「桜の名所」となります。

神宮外苑は、都会のオアシス

青山通りを曲がると、正面に「聖徳記念絵画館」が重量感あふれる姿を見せてくれます。直線道路の両側には、銀杏の並木として知られてます。秋になると落ち葉が「黄色い絨毯」のような雰囲気を醸し出してくれます。

ここで思いだしますのは、今上天皇・皇后陛下のご婚儀の際の車行列です。昭和三十四年四月十日、快晴の中で国民の祝福を受け、この銀杏並木を馬車で通過しました。

当時の夕刊の見出しです。「希望の馬車列に歓声」（日本経済新聞）、「お二人にこやかに　沿道の歓呼のお応え」（朝日新聞）、「花やかに馬車行進」（毎日新聞第二夕刊）、「国民の歓呼にこたえ」（読売新聞第二夕刊）と、報道しております。青山通りは、祝賀一色でした。

青山師範学校跡地ここにあり

東京府青山師範学校は、明治三十三年に青山北町で産声を上げました。以来、昭和十一年までこの地で教員養成学校としての使命を果たしたあと、世田谷区へ移転しました。その間、数多くの優秀な人材を輩出し、学校教育に多大な貢献をしました。この地に、有志の方の建立した碑があります。

善男善女の集まる善光寺

慶長三年（一五九八）、信州・善光寺の江戸宿院として、谷中に開創されました。その後、元禄十六年の火災で焼失しましたので、宝永二年（一七〇五）にこの地に移って来ました。以来、地域の寺院として親しまれて来ております。

境内には、蘭学者である「高野長英」を讃えた顕彰碑が建立されてます。

（清田　和美）

区内あちらこちら
高輪橋架道橋

入り口にさしかかると、誰もがチョッと表情をくずし、それから腰をかがめたり、首をすくめたり、あたかも「ヨロシク」と挨拶するような仕草になるのがユーモラスだ。

品川駅と田町駅のほぼ中間辺り「高輪橋架道橋」（通称車町トンネル）。鉄道線路の下を高輪と芝浦の間、約二百米を真直ぐにくぐり抜けている。ただ困ったことにこの道ごく天井が低くて、高さ制限1・5米の表示が掲げられている。車だったらパトカーは通れるが救急車はダメ。その上道幅も狭いので、一方通行にされている。歩道は分離されているから往来は自由だが、自転車ならハンドルに上体押しつける前傾姿勢で、歩行者は前かがみになって小幅な早足で通って行く。

現在はれっきとした道路なのだが、古い地図を見るとどうもアイマイで、もしかしたらおおっぴらではない抜け道？だったのか。不便を解消するには何やら障害がありそうだが、現状でもとても便利がられているのはたしかなことだ。

港南・芝浦側の見違えるばかりの整備が進み、高輪側との連絡路の必要性は増していて、いずれビックリするような代わりが出現するはずだ。

それまではと精一杯な役目を健気にも荷っているヘンなトンネルに「ご苦労さん」と言いたくなった。

（武　恒雄）

語り部活動・学校訪問　その一

御成門小学校

「御成門小の三年生に、昔の道具や戦時中の話、それに昔使っていた七輪で炭火をおこし餅焼きをして下さい」との依頼があり、二月九日に学校へ出かけました。

私の三年生時代は、ちょうど日本が敗戦した年です。父は焼けた東京に残り、母と姉と兄それに私の四人は茨城県の笠間へ疎開し慣れない田舎暮しをしておりました。今となればそれは遠くかすんだ、セピア色の、でも絶対に一生忘れられない時代でした。食べ物や着る物などすべてが不足した忍耐生活、やがて上陸して来る米兵に『なにをされるかわからない』との噂におびえていたことは心に焼きついています。

昔体験してきたことなので、七輪の火おこしは簡単と思っておりました。ところが便利な生活に慣れた今日、長いことやっていなかったので、用意されていた七輪や炭が湿気を帯びていたこともあり、大変手間がかかってしまいました。悪戦苦闘の結果何とかお餅を焼き上げることができました。黒く焦げたお餅はとても懐かしくおいしかったこと。

子供達と会話しながらの作業実習は楽しいひとときでした。

後日、担任の先生を経て子供達から素敵な可愛い感想文をたくさん戴きました。二、三紹介いたします。

◎　中嶋弘さん、わきの下にばくだんのはへんがあって痛くないですか。「おだいじに」

◎　ぼくが心にのこったのは七輪でもちをやいたことです。目にけむりが入ってくるしかったです。おそわったことは、昔の人は苦しい生活の中さまざまな工夫をしてくらしてきたということです。それは水をなんどもなんども使うということ。ほかのこともしらべてみたいです。

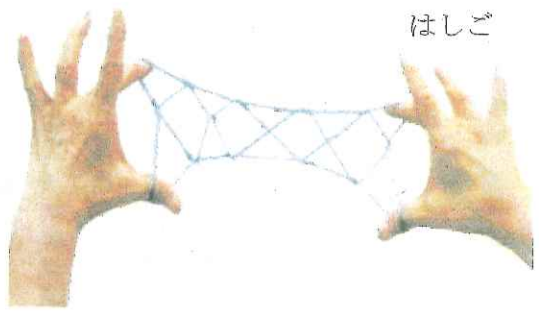
◎　紙しばいで昔は今とちがって大へんだったんだなと思いました。私は紙しばいとせつめいを聞いて私も何かを使う時はかんしゃして使うことにしました。

（註）集団疎開をテーマに語り部が作った紙芝居も当日持参しみなさんに見て貰いました。　（中嶋　房子）

語り部活動・学校訪問　その二

赤羽小学校

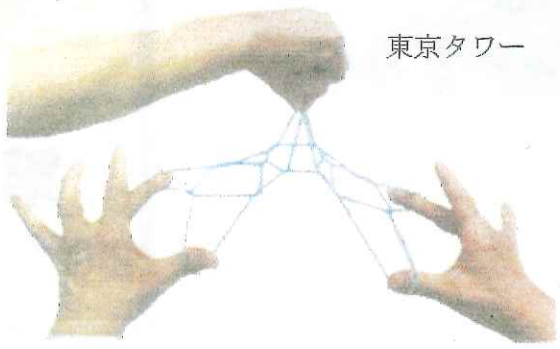
子供達の遊びも時代と共に大きく変化して来ました。現在はテレビゲームからパソコンに至るまで何か昔が忘れ去られているように思いますが、昔から伝わる遊び、親から子へ伝えられてきた遊び、男の子は竹馬・竹とんぼ・メンコ・ビー玉・ケン玉・馬乗り・たが回し等々、女の子は、まりつき・せっせっせ・通りゃんせ・花いちもんめ・ままごと等々。男の子にも女の子にも共通する遊び、かくれんぼ・シャボン玉・なわ跳び・あやとり等々、今子供達の間で昔の遊びが大きく見直されてきているようです。



中でも、あやとりはひもが一本あれば、男の子にも女の子にも、一人あやとり、二人あやとりとして楽しく遊べるひとつです。

先日、赤羽小で三年生の皆さん全員一人一人にひもを配り、ちょうど参観に来ておられたお母さん方にも入っていただき、「はしご」から「東京タワー」作りに挑戦しました。夢中になって取り組み遊ぶ姿が見受けられました。

その後、子供達は休み時間に級友と、帰宅後もお母さん・お父さんと一緒になって、あやとりを楽しまれた様子を学校よりご報告いただき嬉しく思っております。


東京タワー

（宇和島　常子）

新橋の昔を語る（座談会）第3回

第四号では新橋の縁日の、第五号では烏森神社で命名して貰った話を掲載しました。その続編として今回は新橋駅についての語り合いを掲載します。

（I）

司会　烏森と言えば、新橋駅が今の場所にできたときA　最初は烏森駅という名前だったようですね。できた時は未だ汐留に新橋駅があったからでしょう。東海道線の始発駅が汐留にあった新橋駅から東京駅へと移り、汐留の新橋駅が廃止になったときに、烏森駅が新橋駅となったと。

D　最初の新橋駅の建物、駅舎というのですが、もちろん私は写真で見ただけですけれど、とても立派だったんですね。赤レンガ作りで。

司会　昨年平凡社から「幻の東京赤煉瓦駅」という新書版の本が発行されましたが、その本によりますA　と赤レンガの駅舎というのは東京駅、新橋駅、それに万世橋駅の三つだけだそうです。

港区発行の「写された港区・芝地区」によると、赤レンガの建物が完成したのは大正3年、だが関東大震災で焼けてしまう。コンクリート作りのものが完成したのは昭和7年、写真を見比べると赤レンガのものと窓の形や配置などはそっくりです。私たちが見て知っているのはあとのですよね。

C　今ゆりかもめの乗り場への階段がある方向に向いて立っていました。都内にある駅の建物としては貫禄があったような気がします。

A　貫禄といえば東京駅は日本の鉄道の中心なので群を抜いているのは当然として、二番手の上野駅は大きいけれど建物は今風で大味。それにしても東北方面への玄関口である上野駅や、信州方面の玄関口である新宿駅などと違って、通過駅でしかないのに新橋の駅舎がなかなかに立派だったのは不思議ですね。

B　関西方面から東海道線の列車を利用した乗客のうち終着駅である東京駅まで行かずに新橋で降りる人が結構多かった。その人達の手荷物をホームから玄関前の車寄せまで運ぶ赤帽さんを良く目にしました。

D　あの建物の中の、ロビーと呼んでいいのかしら正面の入り口を入ってすぐの空間は、当時私が子供であったからかも知れませんが、とても広く感じましたし、天井が高かったせいでしょうか、堂々としていたような思いが残っています。そして戦前は利用者が今のように多くなかったので構内全体がどことなく落ち着いていました。

司会　今は銀座へ出るのにJRの場合、新橋駅より有楽町駅を利用する人が結構多いようですが。

C　銀座通りへは新橋駅のほうが近い。でも今は人の流れとしては有楽町から数寄屋橋を経て銀座へというコースのほうが上かも。

B　昔、銀座通りに露店が並んでいた頃は新橋駅で降りて銀座へ出る。露店を眺めながら歩くと銀座通りを自然往復することになったりして。だから銀ブラは新橋に始まり、新橋に終わった。

生涯学習センター通信

残暑がまだ厳しい折ですが、季節は確実に「秋」へと向かっております。食欲の秋・読書の秋・行楽の秋等、秋は一年で最も行動的な季節です。

港区にも「昔話」が残っております。青山では「夜泣き石」が伝わっています。芝公園では「片門前七つの井戸」があります。このような情報をお待ちしております。

毎月二回、第二・四水曜日に港区立生涯学習センター内「桜田記念室」に、語り部の会員が集まり、港区昔・今の勉強会を開催しております。「温故知新」という言葉がございますが、港区の昔と今を比較してみることも良いことと思います。

これからも、この活動を積極的に行うために、港区の昔・今に関心をお持ちの方の参加をお願いします。

（K・K）

問合せ　3431・1606
発　行　港区立生涯学習センター
平成十九年十月一日
（次号は来年四月発行予定です。）